Bulletin of the Faculty of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1986, Vol. 33, 291−302.

現代青年の社会意識

久世敏雄　宗方比佐子[1)]　和田　実[2)]
後藤宗理[3)]　浅野敬子[4)]　宮沢秀次[5)]
二宮克美[6)]　大野　久[7)]　内山伊知郎[2)]
鄭　暁斉[2)]

問題と目的

青年期の間に人は自己の意識，態度，価値観などを形成し，明確化していくと考えられる。この意識，態度のなかでも社会意識や社会的態度と呼ばれるものは，さまざまな社会的事象に対する判断や評価を意味しており，青年の社会的行動や，世代的な心理，行動を理解するうえで，興味深いテーマである。

われわれは，この観点から，中学生・高校生の８年間の縦断的資料に基づく社会的態度の形成と変容に関する研究（久世他，1983）をはじめとして，大学生の社会的態度に関する研究（久世他，1979）など，これまでに青年の社会的態度をさまざまな角度から分析，検討してきた。これらの研究においては，社会的態度を，保守的態度，革新的態度，大衆社会的態度という３つの側面からとらえてきたが，この枠組みは1960年代に設定されたものであり，資料は1970年代を中心として収集された。われわれは，このように長年にわたり青年の社会的態度に注目してきたわけであるが，その結果，Kuze, et al.（1985）も示唆しているように，最近の急激な時代背景の変化とそれにともなう青年の意識，態度の変化を考慮し，現代青年の社会的態度を的確に把握するための新たな視点の導入が必要であると考えている。そこで，本研究は，現代青年の社会的態度を記述するうえで有効な新しい視点を模索する一つの段階として位置づけられよう。

この意図にそって，まず，1980年代の青年の意識や行動の特徴を最近の文献をてがかりとして探り，次に，そこでの知見をふまえて社会意識の枠組みを設定する。

風間・秋山（1981）は，1970年代から1980年代にかけての青年の意識や行動の変化を把握する目的から，1970年以降に行われた全国規模の一般国民対象の意識・世論調査のうちで，15・6歳〜29歳について，２回以上行なわれている質問への回答を分析し，1970年代における青年の意識の変化を次のように特徴づけた。すなわち，生活領域においては，「社会より個人」を重視し，現在中心の私生活快楽が強まっていることから，私生活主義の深化が進んでいる。社会・文化領域では，既成の秩序やしきたりに順応し，伝統的価値への親近・同調の傾向を強める中で，対抗文化の後退がみられる。政治領域では，政治的無関心層が拡大している反面，消極的な意味での保守化傾向が顕著となった。

吉田・荒井（1982）は，1972年，76年，81年に京浜地区で行なった三回の調査データに基づき，現代青年の意識の現状と変化を次のように概括した。「私生活主義が青年の意識や生活のさまざまな側面にますます広く浸透している。スポーツなど個人的な楽しみの追求がより積極化し，人間関係では友人を中心に近親・家庭志向を含む身辺中心主義への傾斜が目立ち，生きがい，人生の目標，自分の見通しなど長期的な自己意識や展望の領域でも私生活中心の見方が広がっていることがますますはっきりした。」

また，総理府青少年対策本部（1984）は，1983年に世界11ケ国の18〜24歳の青年を対象として行なった「世界青年意識調査（第３回）」の結果を分析し，日本青年の意識構造を明確化した。この意識調査は，家庭，学校，職業，友人，余暇，国家，社会，人生観などの領域にわた

１）名古屋大学大学院教育学研究科研究生
２）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期）
３）名古屋市立保育短期大学助教授
４）中京女子大学家政学部助教授
５）名古屋経済大学経済学部講師
６）愛知学院大学教養部助教授
７）新潟青陵女子短期大学助教授

るものであるが，数量化Ⅲ類による構造分析により，「国や社会とのかかわりを積極的にもとうとしているか」「国や社会とのかかわりを避けようとしているか」を分ける軸と，「家庭観，人生観などについて伝統的規範意識が強く，かつ各領域における満足度が低いか」「家庭観，人生観などについての伝統的規範にはとらわれておらず，かつ満足度が高いか」を分ける軸が導き出された。この2つの分析軸を用いて，日本青年の意識構造を韓国，アメリカ，フランス，西ドイツ，スウェーデンの青年の意識構造と比較分析した結果，日本青年は韓国についで「伝統的規範同調・不満型」に位置し，6ケ国中最も「社会非コミットメント型」であった。

これらの研究結果に共通してあらわれている現代日本青年の特徴は，大きく以下の2点にまとめることができる。第1に，社会とのかかわりに消極的であり，自分自身のことや身近な生活への関与や関心の増加があげられる。これは，社会学の領域において privatization（私秘主義あるいは私生活主義）とよばれている社会的風潮と軌を一にするものである。privatization とは，宮島（1983）によれば，マイホーム主義，私生活重視の傾向などの私生活中心の人生観や，家庭と夫婦・家族に決定的に関心の集中化された生活様式をさすものである。また，森岡（1983）は privatization を，「より小さい単位の私生活が充足的な価値を中心として一層確保される傾向をいう」と規定している。本研究では，現代青年のこのような私生活主義的な意識を，社会意識・社会的態度の文脈の中でとらえることを意図し，私生活へのコミットメントという軸を設定する。

第2に，我が国の現代青年のいま一つの特徴は，伝統的規範への同調および政治領域での保守化という側面に見出される。Thurstone（1934）以来，社会的態度を記述するための中心的な軸として，保守的態度と革新的態度がしばしば使用されてきたが，現代の青年が「保守化した」とか「革新意識の低下」と表現される一方で，実は今ある保守―革新という軸そのものが，この世代にとって，アクチュアルな基準軸ではなくなりつつあるという意見もある（見田，1984）。そこで，われわれは，伝統や習慣の尊重，上下関係の重視，規則の遵守など社会規範に対する意識を規範意識と呼び，二つめの軸として設定する。

このように，本研究では，現代青年の社会意識を，私生活へのコミットメントと規範意識という新しい二つの視点から分析しようとするものである。この二つの次元にそった質問紙を予備調査の結果にもとづいて作成し，中学・高校・大学生を対象として実施した調査の結果から，社会意識の年齢差・性差を検討する。さらに，大学生の資料のみを用いて，大学間・学部間による社会意識の差異を検討する。

方　法

質問紙の作成

私生活へのコミットメントと規範意識という2つの次元を備えた質問紙を作成するにあたり，次のような手続きにしたがって予備調査を行なった。

現代の青年が，私生活にどの程度コミットしているのか，また，どのような規範意識を有しているのかを，様々な側面から把握するために，家庭，学校，労働，人生観という4つの領域を設け，各領域ごとに，私生活へのコミットメントに関する文章と規範意識に関する文章の両方を収集した。こうして，118項目からなる予備調査用の質問紙が準備された。評定は「非常に賛成」から「非常に反対」までの5段階とし，さらに「意味がわからない」の回答欄を加えた。

予備調査の対象となったのは，中学2年生203名（男子102名，女子101名），高校2年生457名（男子237名，女子220名），大学2年生221名（男子53名，女子168名）の合計881名であり，1985年1月中旬に実施された。

このようにして得られた予備調査のデータをもとに，以下の4つのステップにそって，本調査のための項目を選択した。

(1) まず，質問項目の意味が十分理解されているかどうかを確認するために，「意味がわからない」と回答した者の割合を学年ごとに算出した。その結果，いずれかの学年で「意味がわからない」と回答した者が10%以上を示す8つの項目は，理解度の点で問題があると考えられるので，これらの項目はこの時点で削除し，残りの110項目を次の分析の対象とした。

(2) 項目選択の第2ステップは，私生活へのコミットメントと規範意識の各次元を表わす項目が，次元×領域ごとにある程度のまとまりをもつようにするためのものである。そこで，被調査者全員の項目評定値から，2次元×4領域ごとに，合計項目得点と個別項目得点との相関係数を算出した。その結果，該当する領域の合計項目得点との相関が.15以下であった18個の項目を削除し，残りの92項目を次の分析の対象とした。

(3) 項目選択の第3ステップは，私生活へのコミットメントおよび規範意識と呼ばれる2つの次元が，因子尺度として成立しうるかどうかを確認し，さらに，どちらの因子にも著しく低い負荷量しか示さない項目を取り除くことに目的がある。そこで，92項目に対する被調査者全員の評定値から項目間相関行列を求め，主因子法による

Table 1　予備調査の因子分析結果

次元	領域	項目番号	項目	因子負荷量 I	因子負荷量 II	本調査項目番号
私生活へのコミットメント	家庭	○ 77.	一斉清掃などの町内活動には，積極的に参加したほうがよいと思う。	.54	−.07	21
		57.	自分の家族さえきちんとした生活をしていれば，他人の生活がどうあってもかまわない。	.53	.00	44
		○ 93.	公害問題や省エネルギー対策について，家族でもっと話し合った方がよいと思う。	.46	−.19	15
		9.	私は，世間はどうあれ自分の家庭が幸せでありさえすればよいと思う。	.42	.04	3
		25.	近所づきあいはわずらわしいので，なるべくさけたい。	.42	−.04	33
		○ 61.	家族で，政治や社会の問題を話し合うことは大切だ。	.42	−.20	39
		○ 29.	今の社会では，自分の家族の幸福だけを考えてはいけない。	.40	.02	9
		○ 45.	私たちは，近所迷惑にならないようにテレビやステレオの音量に気をつけるべきだ。	.36	−.13	27
	学校	66.	友だちが非行にはしっても，私には関係ないと思う。	.50	.09	5
		90.	私は，勉強にもクラブ活動にも，まじめに取り組みたい。	.49	−.22	23
		○ 6.	生徒会の活動をすることは，生徒全体のために大切なことだ。	.44	−.09	29
		○ 70.	校内暴力の問題は，学校全体で考えなければならないと思う。	.44	−.02	11
		82.	学校の行事にはあまり参加したくない。	.41	−.08	17
		○ 54.	私たちは，学校ではいつも皆のことを考えて行動した方がよいと思う。	.38	−.19	35
	労働・人生観	23.	職場では，自分ひとりぐらいまじめに働かなくてもよいと思う。	.58	−.13	47
		○ 76.	生きていく上で，何事にも一所懸命に努力することは，大切なことだ。	.54	−.06	1
		52.	社会問題は，自分の生活とはまったく関係のないことだと思う。	.53	−.02	13
		○ 102.	公害問題は，国全体の問題として考えなければならないと思う。	.52	.06	31
		○ 24.	人間は，互いに助けあって生きていくことがいちばん大切だ。	.50	−.04	25
		○ 47.	私は，ボランティア活動や奉仕活動には積極的に参加したい。	.49	−.01	7
		43.	会社では，ほどほどに働けばよいと思う。	.46	−.21	19
		114.	働かないでも楽に暮していけるだけのお金があれば，遊んで暮らしたい。	.44	−.18	50
		○ 51.	自分の割り当てられた仕事は，責任を持って必ずはたさなければいけないと思う。	.43	−.06	42
		○ 63.	人のために役立つ仕事ほど，やりがいがあると思う。	.43	−.15	37
規範	家庶	○ 69.	私は，自分の考えと合わなければ，親の言うことでも従うつもりはない。	−.22	.52	18
		33.	子どもは，親のいうことにさからわない方がよいと思う。	.10	.49	12
		○ 85.	私は，自分の進路について親の考えどおりにする必要はないと思う。	.11	.42	30
		○ 5.	子どもは，親の言うことすべてに従う必要はないと思う。	.04	.39	6
		13.	社会に役立つ人間を育てることこそが家庭の役割だ。	−.20	.39	46
		96.	私は，自分で判断することができるようになっても，親の考えは尊重する方がよいと思う。	−.06	.37	41
		17.	子どもは親を尊敬すべきだ。	−.21	.33	49
		65.	長男が家をつぐのは当然だ。	.14	.33	24
		103.	家庭では，父親がすべての実権を握るのが望ましい。	.11	.33	36
	学	10.	学校の規則は必ず守るべきだ。	−.12	.58	2
		58.	私は，先生の言うことには従った方がよいと思う。	−.11	.58	32
		○ 78.	服装などについて細かく校則で決められるのはいやだ。	−.01	.55	8
		○ 110.	学校の規則は，自分たちの生活に合うように作り変えていきたい。	−.01	.42	20
		42.	私にとって，遅刻や欠席をしないことは大切なことである。	−.22	.39	14

意識	校	113. 先生には，いつも敬語を使わなければならない。	−.23	.37	43
		26. 生徒にとって，いちばん大切な目標はよい成績をとることである。	.27	.35	48
		74. 先輩と後輩との上下関係はいつも守らなければならないと思う。	−.01	.34	38
		18. 私にとって，勉強する目的はよりよい大学や会社に入ることである。	.19	.32	26
	労働・人生観	44. 親や先輩など目上の人の意見には従った方がよいと思う。	−.08	.49	4
		35. 今の世の中では，まじめに働くことがいちばんりっぱなことだ。	−.05	.44	34
		○ 80. 社会のしきたりや習慣にとらわれた生活はいやだ。	−.22	.44	45
		○ 64. 規則やルールにとらわれずに，自由に暮したい。	−.25	.42	10
		3. 職場では，いつも上司の言うことに従った方がよいと思う。	.13	.37	22
		19. 職場では，つらいこともできるだけ辛抱しなければならない。	−.16	.34	16
		8. 人が生きていく上でなによりも大切なのは，社会の役に立つことだ。	−.21	.32	28
		○ 99. 毎日毎日を自分の好きなように暮らしたいと思う。	−.27	.32	40
残余項目		○ 112. 私は，多くの人の利益のためには多少の我慢はしなければならないと思う。	.35	−.07	—
		81. 親孝行は，子どもの義務である。	.25	.29	—
		100. 私たちは，校風を皆で守り育てていくべきである。	.40	.37	—
		116. 学校生活を円滑にするためには，規則が必要だ。	−.23	.34	—
		118. 中学生や高校生には，制服があるほうがよいと思う。	−.14	.28	—
		○ 46. 学校の規則も自分の考えに合わないならば，守らなくてもよいと思う。	−.31	.48	—
		○ 62. 私は，いやなことがあるなら，学校へ無理に行かなくてもよいと思う。	−.35	.32	—
		○ 94. 授業中でも，おもしろくなければ，別のことをしていてもかまわないと思う。	−.37	.40	—
		○ 39. 気に入らないことがあれば，会社をやめたりかわってもかまわないと思う。	−.30	.33	—
		○ 55. 職場では，自分の考えに合わなければ，全体の意見に従う必要はない。	−.23	.23	—
		○ 105. 今の社会では，働くことにそれほどの価値はない。	−.43	.25	—
		11. 今の世の中では，一所懸命仕事をしてもしかたないと思う。	.35	−.13	—
		27. あくせく仕事をするよりも生活を楽しんだ方がよいと思う。	.29	−.28	—
		75. 私は，働くのを最少限にして生活を楽しみたい。	.32	−.27	—
		○ 31. 病人や老人など弱い立場の人を助ける仕事はもっと尊重されるべきだ。	.42	.10	—
		○ 98. 働かないで，楽に暮らしていけるだけのお金があっても，何か仕事をしたい。	.39	−.15	—
		12. 私たちは，公園や駅など公共の場所を汚さないようにしなければならない。	−.34	−.00	—
		28. 私たちは，人にうしろ指をさされないような生活をすべきだと思う。	−.16	.25	—
		60. 古くからのしきたりは，なるべくうけついでいった方がよいと思う。	−.16	.23	—
		○ 32. 何から何まで法律に従っていたら，自分のしたいことは何もできない。	−.19	.27	—
		○ 48. 今の世の中では，いくら努力してもむくわれることは少ないと思う。	.28	.14	—
		4. 人に迷惑をかけなければ，何をしてもかまわないと思う。	.35	−.24	—
		20. 自分のしたいことをするためには，人に多少の迷惑をかけることがあってもしかたがない。	.40	−.09	—
		68. 政治や社会の問題など難しいことを考えるのはめんどうである。	.35	−.17	—
		84. 世界情勢や人口問題などを心配するより，自分の身のまわりのことの方が大切である。	.40	−.03	—
		106. 私は，生きていく上で信頼できるのは，結局，自分だけだと思う。	.27	−.04	—
		○ 56. 私たちは，政治や経済の動きにもっと関心を持った方がよいと思う。	.36	−.12	—
		○ 72. 献血や募金には，積極的に協力したい。	.43	.00	—
		○ 88. 何をするにも，自分のことより，まず他人のことを考えるべきである。	.31	−.08	—

注）○印の項目は逆転項目

因子分析を行った。その結果，抽出された2因子は想定していた2つの次元とほぼ一致していたので，2つの次元は因子尺度として成立することが確認された。また，この因子分析での共通推定値が.085以下であった13個の項目は，2つの因子のどちらにも低い負荷量しか示さないので，これらを削除し，残りの79項目をさらに次の分析の対象とした。

(4) 項目選択の最終ステップでは，79項目を対象とした因子分析の結果に基づき，因子尺度としての2つの次元を代表する，より適切な項目を選別する作業が行なわれた。Table 1は，主因子法により2因子を抽出した場合の，バリマックス回転後の因子負荷量である。まず，両因子に.30以上の負荷量をもつ項目を削除した。つぎに一方の因子に高い負荷量を示す項目を選んだが，この時点で，各領域に含まれる項目数のバランスを考慮し，労働と人生観の次元をあわせて1領域とみなした。すなわち，各因子について，家庭，学校，労働・人生観の3領域ごとに因子負荷量の高い10項目のうち.30以上の負荷量のものを選び出した。*

このようにして，私生活へのコミットメント24項目（家庭＝8，学校＝6，労働・人生観＝10）規範意識26項目（家庭＝9，学校＝9，労働・人生観＝8）の合計50項目からなる質問紙が作成された。（項目は Table 1参照）

被調査者

被調査者は，名古屋市近郊の公立中学校の1年生361名（男子185名，女子176名），公立高校の1年生267名（男子144名，女子123名），そして国立・私立の大学および短期大学の学生（主として2年生）979名（男子551名，女子428名）のあわせて1607名である。

調査時期

中学生と高校生は，1985年の3月に実施した。一方，大学生は，1985年の6月から7月にかけて実施した。このように，年度が変わったので大学生については2年生を対象とした。

結　果

1．枠組み（尺度）の適切さについて

まず，枠組み（尺度）について，各下位尺度の内的整合性と下位尺度間の関係から検討する。

各下位尺度の内的整合性を示すα係数を学校別に表示したのが Table 2 である。労働・人生観の規範尺度が中学・高校・大学ともに低くなっているが，他の下位尺度については，おおむね内的整合性は高いと考えられる。

Table 2　下位尺度の信頼性（α係数）

	中学 (N=361)		高校 (N=267)		大学 (N=979)	
	私生活	規範	私生活	規範	私生活	規範
家庭	.775	.716	.752	.555	.708	.690
学校	.597	.754	.700	.694	.615	.652
労・人	.764	.591	.748	.557	.706	.593

注）私生活…私生活へのコミットメント，規範…規範意識
労・人…労働・人生観

Table 3－1　下位尺度間相関（中学生；N＝361）

		私生活			規範		
		家庭	学校	労・人	家庭	学校	労・人
私生活	家庭						
	学校	.616 ***					
	労人	.723 ***	.670 ***				
規範	家庭	−.282 ***	−.334 ***	−.324 ***			
	学校	−.205 ***	−.306 ***	−.236 ***	.609 ***		
	労人	−.422 ***	−.482 ***	−.474 ***	.562 ***	.618 ***	

注）*** ……P＜.001；** ……P＜.01；* ……P＜.05
私生活…私生活へのコミットメント，規範…規範意識
労・人…労働・人生観

* ただし，項目116（規範意識，学校）については，類似した内容の項目があるために例外として選択しなかった。

Table 3－2　下位尺度間相関（高校生；N＝267）

		私生活			規範		
		家庭	学校	労・人	家庭	学校	労・人
私生活	家庭						
	学校	.606 ***					
	労人	.609 ***	.702 ***				
規範	家庭	−.037	−.145 *	−.161 **			
	学校	.013	−.164 **	−.114	.559 ***		
	労人	−.218 ***	−.326 ***	−.360 ***	.491 ***	.565 ***	

注）略字・記号はTable 3−1に同じ

Table 3－3　下位尺度間相関（大学生；N＝979）

		私生活			規範		
		家庭	学校	労・人	家庭	学校	労・人
私生活	家庭						
	学校	.641 ***					
	労人	.629 ***	.624 ***				
規範	家庭	−.115 ***	−.186 ***	−.183 ***			
	学校	−.098 **	−.172 ***	−.155 ***	.535 ***		
	労人	−.324 ***	−.288 ***	−.387 ***	.520 ***	.517 ***	

注）略字・記号はTable 3−1に同じ

次に，各下位尺度ごとの合成得点（尺度得点）間の相関を中学・高校・大学生別に示したのが Table 3－1 から Table 3－3 である。男女をまとめたのは，男女間の相関パターンに大きな違いが見られなかったためである。Table 3から，中学・高校・大学生ともに領域が異なっても，各規範意識間の相関は.491～.618，私生活へのコミットメントでは，.606～.723と相互にかなり高く，両次元とも，その測定している内容は，領域を越えてある一貫した意識を測定していると考えられる。また，同じ領域における規範意識と私生活へのコミットメントの相関に注目すると，全体として弱い（負の）相関関係が見いだされ，この2つの次元が別の内容を測定していることが示唆される。さらに，中学・高校・大学生別に見ると，領域ごとのこの2つの次元間の相関が中学生では－.282～－.474，高校生では－.037～－.360，そして大学生では－.115～－.387と中学生よりも高校生，大学生で小さくなる傾向がみられた。

2．年齢差・性差についての検討

ここでは，各下位尺度得点について中学・高校・大学生という年齢差と男子・女子という性差について検討する。

各尺度の平均値と標準偏差を中学・高校・大学生別，男女別にまとめたのが Table 4 である。

中学・高校・大学生すべてに共通しており，明確で一貫した傾向は，規範意識が家庭や学校と比べて，労働・人生観の領域で高い，すなわち規範受容的になっているということである（家庭－労働・人生観：中学 t (360)＝5.54；高校 t (266)＝9.11；大学 t (978)＝15.57，学校－労働・人生観：中学 t (360)＝7.61；高校 t (266)＝

Table 4　下位尺度ごとの平均値と標準偏差（中・高・大）

		中学			高校			大学		
		男子 (N=185)	女子 (N=176)	全体 (N=361)	男子 (N=144)	女子 (N=123)	全体 (N=267)	男子 (N=551)	女子 (N=428)	全体 (N=979)
私生活	家庭	2.49 (0.58)	2.47 (0.55)	2.48 (0.57)	2.51 (0.51)	2.42 (0.40)	2.47 (0.46)	2.37 (0.43)	2.30 (0.47)	2.34 (0.45)
	学校	2.25 (0.53)	2.32 (0.56)	2.28 (0.54)	2.39 (0.57)	2.25 (0.40)	2.33 (0.50)	2.35 (0.47)	2.27 (0.45)	2.31 (0.47)
	労・人	2.25 (0.53)	2.27 (0.51)	2.26 (0.52)	2.27 (0.47)	2.16 (0.37)	2.22 (0.43)	2.16 (0.39)	2.12 (0.40)	2.14 (0.40)
規範	家庭	2.85 (0.57)	2.69 (0.51)	2.77 (0.55)	2.68 (0.40)	2.74 (0.37)	2.71 (0.38)	2.73 (0.45)	2.68 (0.42)	2.71 (0.44)
	学校	2.90 (0.57)	2.52 (0.56)	2.72 (0.59)	2.74 (0.48)	2.72 (0.46)	2.73 (0.47)	2.83 (0.43)	2.78 (0.41)	2.81 (0.42)
	労・人	2.97 (0.46)	2.85 (0.45)	2.91 (0.46)	2.87 (0.41)	3.00 (0.37)	2.93 (0.40)	2.90 (0.42)	2.94 (0.41)	2.92 (0.42)

注）私生活…私生活へのコミットメント，規範…規範意識
労・人…労働・人生観

7.95；大学 t (978)＝8.33，すべてp＜.001，対応のある t 検定による)。また，家庭と学校の領域の間については，中学生と高校生では何ら差はみられないが（中学：t (360)＝1.88，；高校：t (266)＝0.80，ともにn.s.，対応のある t 検定による)，大学生は家庭よりも学校の領域で有意に規範受容的になっている（t (978)＝7.53，p＜.001，対応のある t 検定による)。

次に，それぞれの下位尺度ごとに 3（年齢；中学生，高校生，大学生）× 2（性）の分散分析を行なった。

(1) 私生活へのコミットメント

① **家庭**：家庭については，大学生よりも中学生や高校生の方が私生活にコミットしており（F(2,1601)＝15.18，p＜.01；t 検定による下位検定：中学生と大学生 t (1338)＝4.68，高校生と大学生 t (1244)＝4.16，ともに p＜.01)，性差については女子よりも男子の方が私生活にコミットしている（F(1,1601)＝6.43，p＜.05)。

② **学校**：学校については，女子より男子の方が私生活にコミットしている（F(1,1601)＝4.59，p＜.05）が中学生では逆に男子より女子の方が私生活にコミットしている（学校×性の交互作用：F(1,1601)＝4.18，p＜.05)。

③ **労働・人生観**：労働・人生観については，大学生よりも中学生，高校生の方が私生活にコミットしている（F (2,1601)＝11.06，p＜.01；t検定による下位検定：中学生と大学生 t (1338)＝4.47，高校生と大学生 t (1244)＝2.85，ともにp＜.01)。

(2) 規範意識

① **家庭**：家庭については，中学生は大学生よりも規範受容的である（F(2,1601)＝3.19，p＜.05；t 検定による下位検定：t(1338)＝1.78，p＜.10)。また女子よりも男子の方が規範受容的となっている（F(1,1601)＝6.02，p＜.05)。

② **学校**：学校については，大学生の方が中学生と高校生より規範受容的であり（F(2,1601)＝5.62，p＜.01；t 検定による下位検定：中学生と大学生 t (1338)＝3.10，高校生と大学生 t (1244)＝2.68，ともにp＜.01)，性差については女子よりも男子の方が規範受容的であり（F (1,1601)＝25.47，p＜.01)，このことは中学生でより顕著に現れている（学校×性の交互作用：F (2,1601)＝18.37，p＜.01)。

③ **労働・人生観**：労働・人生観については，中学生では女子よりも男子の方が規範受容的であるが，高校生では，逆に男子より女子の方が規範受容的となっており，さらに，大学生では男女に差がなくなっている（学校×性の交互作用：F(2,1601)＝7.31，p＜.01)。

以上の年齢差，性差の全体的傾向をまとめておく。私生活へのコミットメントについては，学校の領域を除いて大学生よりも高校生，中学生の方が私生活にコミットしている。性差については，労働・人生観の領域を除いて男子の方が女子よりも私生活によりコミットしている。ただし，学校での中学生は，逆に男子よりも女子の方がより私生活にコミットしている。一方，規範意識においては，家庭の領域では中学生の方が高校生，大学生よりも規範受容的であるが，学校の領域ではまったく逆に大学生の方が中学生や高校生よりも規範受容的となっている。性差については，労働・人生観を除いて男子の方が女子よりも規範受容的となっている。

これまでに述べてきた特徴は，いずれの年齢，性においてもニュートラルポイントである3点を越えておらず，私生活にコミットしている，あるいは規範受容的である，というのはあくまでも中学生，高校生，大学生の比較の中での相対的なものである。

3．大学生間の比較

ここでは，各大学ごとの特徴を検討する。ただし，比較するために一定の人数がいる学部のみを取り出した。その内訳は Table 5 に示されている。I（女）のみが短期大学である。そして，N（男），A（男・女），I（女）が国立であり，その他は私立の大学である。S（女）とJ（女）は，女子大学である。AとCは，同一大学の同一学部で男女両方の資料を得た。

Table 5　被調査者の内訳

大学		学部	学年	人数
国立	N（男）	工学	1	91
	A（男）	教育	2	99
	A（女）	教育	2	101
	I（女）		2	72
私立	G（男）	法学	2	62
	K（男）	工学	2	99
	C（男）	体育	3	108
	C（女）	体育	3	63
	S（女）	文学	2	100
	J（女）	体育	2	89

計884名，男459名，女425名

まず，国立大学生か私立大学生かによって比較検討する。各尺度の平均値と標準偏差を示したのが Table 6 である。一貫して言えることは，どの領域においても国立大学よりも私立大学の学生の方が規範意識が強い，すなわち規範受容的であるということである（家庭：$t(822)=4.74$，$p<.001$，学校：$t(822)=3.88$，$p<.001$，労働・人生観：$t(822)=1.76$，$p<.10$）。また，私生活へのコミットメントについては，どの領域においても国立大学生と私立大学生に差はみられない（家庭：$t(822)=0.97$，n.s.，学校：$t(822)=0.31$，n.s.，労働・人生観：$t(822)=0.37$，n.s.）。

次に，個々の大学間について検討していく。個々の大学について，各尺度の平均値と標準偏差を示したのが，Table 7 である。また，領域ごとにこの10群をそれぞれ比較したのが Table 8－1 から Table 8－3 である。以下に，それぞれの下位尺度ごとに検討していく。ただし，中学・高校・大学生の比較と同じく，ニュートラルポイントである3点を越えているものがほとんどなく，あくまでも相対的なものである。

(1) 私生活へのコミットメント

① **家庭**：最も私生活にコミットしているのは，N（国・男）とA（国・男）であり，A（国・女），J（私・女），C（私・女）よりも有意に高くなっている。一方，最も私生活にコミットしていないのは，A（国・女）であり，G（私・男），A（国・男），S（私・女），N（国・男）

Table 6　下位尺度ごとの平均値と標準偏差

		国立 男子 (N=190)	国立 女子 (N=173)	国立 全体 (N=363)	私立 男子 (N=269)	私立 女子 (N=252)	私立 全体 (N=521)
私生活	家庭	2.41 (0.43)	2.28 (0.39)	2.35 (0.42)	2.33 (0.41)	2.32 (0.52)	2.32 (0.47)
	学校	2.38 (0.48)	2.24 (0.40)	2.31 (0.45)	2.30 (0.47)	2.29 (0.48)	2.30 (0.48)
	労・人	2.22 (0.40)	2.05 (0.39)	2.13 (0.40)	2.11 (0.38)	2.16 (0.40)	2.14 (0.39)
規範	家庭	2.65 (0.43)	2.59 (0.41)	2.62 (0.42)	2.78 (0.45)	2.73 (0.42)	2.76 (0.44)
	学校	2.73 (0.42)	2.75 (0.37)	2.74 (0.39)	2.90 (0.43)	2.80 (0.43)	2.85 (0.43)
	労・人	2.87 (0.41)	2.91 (0.40)	2.89 (0.41)	2.93 (0.42)	2.96 (0.42)	2.94 (0.42)

注）私生活…私生活へのコミットメント，規範…規範意識
労・人…労働・人生観

Table 7　下位尺度ごとの平均値と標準偏差（10群）

		国立				私立					
		N(男)	A(男)	A(女)	I(女)	G(男)	K(男)	C(男)	C(女)	S(女)	J(女)
私生活	家庭	2.41 (0.44)	2.41 (0.43)	2.23 (0.39)	2.34 (0.38)	2.38 (0.46)	2.29 (0.40)	2.33 (0.39)	2.26 (0.33)	2.40 (0.52)	2.27 (0.62)
	学校	2.45 (0.48)	2.31 (0.48)	2.18 (0.40)	2.31 (0.40)	2.33 (0.43)	2.34 (0.48)	2.26 (0.48)	2.12 (0.39)	2.46 (0.49)	2.21 (0.47)
	労・人	2.23 (0.41)	2.20 (0.40)	2.07 (0.39)	2.01 (0.39)	2.13 (0.41)	2.08 (0.35)	2.13 (0.38)	2.06 (0.38)	2.24 (0.44)	2.15 (0.36)
規範	家庭	2.63 (0.40)	2.67 (0.46)	2.59 (0.40)	2.59 (0.42)	2.78 (0.40)	2.80 (0.43)	2.76 (0.49)	2.74 (0.47)	2.71 (0.41)	2.77 (0.40)
	学校	2.78 (0.38)	2.69 (0.45)	2.69 (0.34)	2.82 (0.39)	2.90 (0.43)	2.93 (0.43)	2.88 (0.44)	2.82 (0.47)	2.81 (0.40)	2.78 (0.44)
	労・人	2.94 (0.46)	2.80 (0.35)	2.86 (0.38)	2.98 (0.43)	2.97 (0.40)	3.01 (0.36)	2.83 (0.45)	2.92 (0.40)	2.96 (0.40)	2.97 (0,45)

注）私生活…私生活へのコミットメント，規範…規範意識
労・人…労働・人生観

Table 8－1　下位検定の結果（10群の比較）

		国立				私立					
		N・男	A・男	A・女	I・女	G・男	K・男	C・男	C・女	S・女	J・女
国立	N(男)			⊛⊛					⊛		⊛
	A(男)			⊛⊛					⊛		⊛
	A(女)					*				⊛⊛	
	I(女)										
私立	G(男)	⊛		⊛⊛	⊛						
	K(男)	⊛⊛	⊛	⊛⊛	⊛⊛						
	C(男)	⊛		⊛⊛	⊛⊛						
	C(女)			⊛	⊛⊛						
	S(女)			⊛							
	J(女)	⊛		⊛⊛	⊛⊛						

注）***……P＜.001，**……P＜.01，*……P＜.05
上段が私生活へのコミットメントの家庭，下段が規範意識の家庭
⊛は，左側に書かれた大学の方が得点が高いことを示している

よりも有意に低くなっている。同じ大学であっても，A（国・男）とA（国・女）は両極端であり，興味が持たれる。

② **学校**：最も私生活にコミットしているのは，S（私・女）であり，A（国・男），A（国・女），J（私・女），I（国・女），C（私・男），C（私・女）よりも有意に高くなっている。一方，私生活に最もコミットしていないのは，C（私・女）で，G（私・男），A（国・男），S（私・女），I（国・女），N（国・男），K（私・男）よりも有意に低くなっている。

Table 8－2　下位検定の結果（10群の比較）

		国立				私立					
		N・男	A・男	A・女	I・女	G・男	K・男	C・男	C・女	S・女	J・女
国立	N(男)		⊛	⊛⊛⊛	⊛			⊛⊛	⊛⊛⊛		⊛⊛⊛
	A(男)								⊛	*	
	A(女)						*			***	
	I(女)		⊛	⊛					⊛	*	
私立	G(男)		⊛⊛	⊛⊛					⊛		
	K(男)	⊛	⊛⊛⊛	⊛⊛⊛					⊛⊛		
	C(男)		⊛⊛⊛	⊛⊛⊛						***	
	C(女)		⊛							***	
	S(女)		⊛	⊛							⊛⊛⊛
	J(女)						*				

注）略字・記号は Table 8−1 に同じ

Table 8－3　下位検定の結果（10群の比較）

		国立				私立					
		N・男	A・男	A・女	I・女	G・男	K・男	C・男	C・女	S・女	J・女
国立	N(男)			⊛⊛	⊛⊛⊛		⊛⊛		⊛⊛		
	A(男)	*		⊛	⊛⊛		⊛		⊛		
	A(女)										
	I(女)		⊛⊛					*		***	*
私立	G(男)		⊛⊛								
	K(男)		⊛⊛⊛	⊛						**	
	C(男)				*	*	**				
	C(女)									**	
	S(女)		⊛⊛					⊛			
	J(女)		⊛⊛					⊛			

注）略字・記号は Table8−1に同じ

③　**労働・人生観**：最も私生活にコミットしているのは，S（私・女）であり，I（国・女），K（私・男），C（私・女）よりも有意に高くなっている。一方，私生活に最もコミットしていないのは，I（国・女）であり，A（国・男），S（私・女），J（私・女），N（国・男），C（私・男）よりも有意に低くなっている。

(2)　規範意識

①　**家庭**：最も規範受容的なのは，K（私・男）であり，

A（国・男），A（国・女），I（国・女），N（国・男）よりも有意に高くなっている。一方，最も規範受容的でないのは，A（国・女）とI（国・女）であり，G（私・男），J（私・女），K（私・男），C（私・男），C（私・女）よりも有意に低くなっている。

② **学校**：家庭と同じく最も規範受容的なのは，K（私・男）であり，A（国・男），A（国・女），J（私・女），N（国・男）よりも有意に高くなっている。一方，最も規範受容的でないのは，A（国・男），A（国・女）であり，S（私・女），I（国・女），K（私・男），C（私・男），G（私・男）よりも有意に低くなっている。なお，このA大学は，教員養成の教育学部のみの単科大学である。

③ **労働・人生観**：家庭，学校と同じく最も規範受容的なのは，K（私・男）であり，A（国・男），A（国・女），C（私・男）よりも有意に高くなっている。一方，最も規範受容的でないのは，A（国・男）であり，S（私・女），J（私・女），I（国・女），N（国・男），K（私・男），G（私・男）よりも有意に低くなっている。

討　論

1．枠組みの設定について

現代青年の社会意識を私生活へのコミットメントと規範意識という新たな視点からとらえようと試みた。その際，家庭，学校，労働・人生観の3つの領域を設け，それぞれの領域ごとに検討した。次元・領域ごとの各下位尺度得点をみると，中学・高校・大学生ともにすべての領域で規範受容的でなく，私生活にコミットしていないという結果が得られた。研究の出発点で我々は現代青年の社会意識の特徴が私生活中心の態度と脱規範の傾向という点に見いだされるであろうと予想したが，今回の結果からは十分に検証されなかった。このような結果がみちびかれた原因の一つは，質問項目の内容にあったと思われる。私生活へのコミットメントも脱規範の態度も，項目として否定的な面が強調され，肯定的な面がいかされていなかったために，社会的望ましさが評定に大きく影響を及ぼしたものと思われる。

しかし，それぞれの領域ごとに，私生活へのコミットメントと規範意識の相関をみると概して弱い（負の）相関関係しかなく，別の内容を測定していることが考えられる。しかも，高校生，大学生では中学生より相関係数の絶対値が小さくなっており，年齢とともに，私生活へのコミットメントと規範意識の両次元を区別してとらえていることが推測される。すなわち，中学生から高校生，大学生となるにつれ，各自の価値観，意識，および態度が明確になり，そのために私生活へのコミットメントと規範意識の次元がより区別されてきたと考えられる。

以上のことから，項目作成上の問題点は残るものの，現代青年の社会意識を研究するうえで，有効な枠組みを新たに提出できたと言えよう。今後は，規範意識，私生活へのコミットメントともに理論的な面をさらに明確にし，より適切な項目を作成すべきであろう。

2．年齢差による比較について

中学・高校・大学生ともに規範意識が，家庭や学校と比べて，労働・人生観の領域で高い，すなわち規範受容的になっている。これは，どういうことを意味しているのだろうか。家庭や学校というのは，学生にとって非常に身近な領域である。身近なことゆえに自分の事として理解しやすく（考えやすく），したがって規範に関する自分自身の判断が反映されやすいのであろう。それに対し，労働・人生観の内容は，職場でのことや抽象的なことなど，被調査者の日常生活と距離があるために，「その方が良いに決まっている」という，社会的に望ましい反応へとかたむいたのではないかと思われる。

また，家庭と学校の領域は，中学生と高校生では差はみられないが，大学生は家庭よりも学校の領域で有意に規範受容的になっている。この理由として，第一に，項目の内容が大学生にはふさわしくなかったのではないかと思われる。例えば，服装とか，遅刻や欠席の問題に関しては，大学生では中学生，高校生に比べて，さほど生活に密着した重要な問題ではないかもしれない。第二に，第一とも関連するが，「喉もとすぎれば熱さ忘れる」と言われるように，自己関与の低い（既に通り過ぎた）問題なので「その方が良い」という常識的な反応になってしまったと思われる。

次に，私生活へのコミットメントについて考えておく。主な結果は，学校の領域を除いて，大学生よりも中学生，高校生の方がより私生活にコミットしているということである。家庭や労働・人生観の領域で，中学生や高校生よりも大学生の方が私生活にコミットしていない理由は，含まれている項目が，近所づきあいや，町内活動，公害などの政治・社会問題だからだと思われる。つまり，成人に近づき，これらのことが中学生や高校生よりも身近になり，世間一般の事にも関心が深まってきたからであろうと思われる。

3．大学生間の比較について

私生活へのコミットメントについては，どの領域においても国立大学と私立大学生に差はみられなかった。

次に，規範意識については，どの領域においても国立

大学よりも私立大学の学生の方が規範意識が強い，すなわち規範受容的であった。この理由として，各私立大学が規範受容的な学風を有しており，かつ集まる学生もそのような学風になじみやすい傾向があるためではないだろうか。他の理由として，大学生の被調査者が主として2年生であったことから，入学後，学生がそれぞれの大学の集団雰囲気に影響されたことも考えられる。

国立大学生か私立大学生かによって，このように規範意識が異なる理由は，大学入学直後に調査をすることによってより明らかになるであろう。

文　献

風間大治・秋山登代子　1981　現代の青年像――70年代を中心とした青年の意識変化――　NHK放送文化調査研究年報，**26**，1-58.

久世敏雄・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・大野　久・内山伊知郎　1985　青年期の社会的態度に関する縦断的研究――個人の変化過程の分析――　教育心理学研究，**33**，11-21.

久世敏雄・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美　1979　大学生の社会的態度に関する研究　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**26**，37-53.

Kuze, T., Goto, M., Ninomiya, K., Asano, K., Miyazawa, S., Munekata, H., Ohno, H., and Uchiyama, I. 1985 A longitudinal study on development of adolescents' social attitudes. *Japanese Psychological Research*, **27**, 195-205.

森岡清美　1983　日常生活における私秘化　社会学評論，**34**，130-137.

見田宗介　1984　新版現代日本の精神構造　弘文堂

宮島　喬　1983　現代社会意識論　日本評論社

総理府青少年対策本部編　1984　世界の青年との比較からみた日本の青年――世界青年意識調査（第3回）報告書――　大蔵省印刷局

Thurstone, L. L. 1934 The vector of mind. *Psychological Review*, **41**, 1-32.

吉田　潤・荒井宏祐　1982　青年の意識――1972～1981――　NHK放送文化調査研究年報，**27**，171-224.

（1986年7月31日　受稿）

ABSTRACT

SOCIAL CONSCIOUSNESS OF MODERN ADOLESCENTS

Toshio KUZE, Hisako MUNEKATA, Minoru WADA, Motomichi GOTO, Keiko ASANO, Shuji MIYAZAWA, Katsumi NINOMIYA, Hisashi OHNO, Ichiro UCHIYAMA, Xiao-Qi ZHENG

The purpose of this study is to present a new framework to understand social consciousness of modern adolescents. It consists of two dimensions and three domains. The former are privatization (commitment to his own life) and consciousness of the norm. The latter are home, school, and labor and a philosophy of a life.

The subjects consisted of 361 junior high school students (185 boys, 176 girls), 267 high school students (144 boys, 123 girls), and 979 undergraduates (551 boys, 428 girls).

Major findings obtained are summarized as follows:

(1) Two dimensions we developed are effective, but need to be refined further.

(2) The norm about home is granted most by junior high school students. Undergraduates accepted the norm about school most. On the other hand, the junior high school and the high school students' privatization on home is greater than the undergraduates'. The undergraduates' privatization on school is greatest of all.